

理美容師の志望者はどのような動機をもつのか —自由回答の計量テキスト分析—

森田 厚、小林 盾、川端 健嗣

[要約]

この論文では、理美容師の志望者に着目し、理容師志望者と美容師志望者、男性と女性とで、志望動機に違いがあるのかを検討する。さらに、男性の理容師志望者、女性の理容師志望者、男性の美容師志望者、女性の美容師志望者の4グループで、志望動機が異なるかを調べる。データは、首都圏にある理美容専門学校で、量的調査を実施して収集した（有効回収数は268人、回収率は当日の出席者全員）。なぜ理容師（または美容師）になりたいと思ったかを、自由回答で記述してもらい、計量テキスト分析した。その結果、理容師志望者と美容師志望者、男性と女性、4グループで、志望動機に違いがあった。とくに、男性の理容師志望者には家業が、女性の理容師志望者には技術修得が、男性の美容師志望者には憧れ・向いてることが、女性の美容師志望者には人を喜ばせることが、特徴的な志望動機となっていた。したがって、理美容師への動機は多様であり、グループごとに特徴があった。このことは、理美容師の入職や転職において、グループごとに異なるサポートが必要であることを示唆する。

[キーワード]

理容師、美容師、動機、自由回答、計量テキスト分析

1 リサーチ・クエスチョンと仮説

1.1 リサーチ・クエスチョン

国勢調査によれば、1970～95年における20～24歳のコーホート（5年ごと6つのコーホートの合計）のうち理美容師は、そのごの15年間（35～39歳となるまで）でおおむね減少する（図1、20～24歳を100%とする）。ただし、男性美容師は20代後半から30代前半で増え、その後横ばいとなる。男性理容師は、30代後半までに90%前後となり、10%ほどが理容師以外へと離職している。女性理容師は80%前後で推移する。もっとも減少幅が大きいのが女性美容師で、30代後半までに55%ほどとなり、45%ほどが美容師を辞めている。

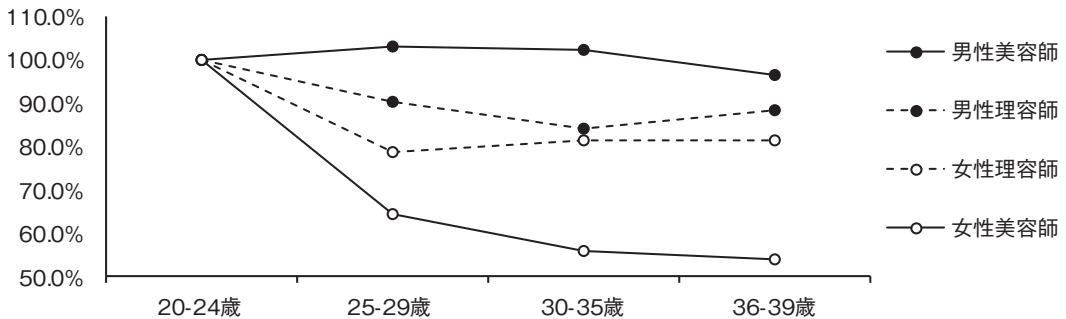


図1 男女別の理美容師数の推移

(注) 出典：国勢調査。1970～95年における20～24歳のコーホートのうち理美容師の推移。1970年、75年、80年、85年、90年、95年調査における6つのコーホートを合計し、そのご15年間の推移を集計した。20～24歳時の理美容師数を100とする。

なぜ、このように理容師と美容師、男性と女性のあいだで「理美容師以外の仕事への離職」に違いがあるのだろうか。理容師と美容師は、どちらも髪を整える職業であり、独占資格である（理容師は理容師法、美容師は美容師法による）。したがって、一見すると離職率に理美容師のあいだや男女で、差はなくてもよさそうに見える。

理美容師どちらも、資格取得のためには2年以上専門学校などに通学し、卒業することが求められる。しかし、理美容師の資格志望者のあいだで、志望動機が多様なため、同じような仕事をするとしても、動機とのギャップの違いから離職率に差が生じるのかもしれない。

そこで、この論文では以下のリサーチ・クエスチョンにアタックする。

リサーチ・クエスチョン 理容師志望者と美容師志望者、男性と女性とで、志望動機に違いがあるのか。

もしこの問題が解明できれば、動機と現実のギャップを埋めることで、離職を未然に防げるかもしれない。もし未解明のままであれば、せっかく職業資格という人的資本を獲得しても、活用できない危険がある（人的資本についてはBecker 1964）。その結果、個人にとっても社会にとっても、おおきな損失となりかねない。

1.2 先行研究

千田（2015）によれば、理容師資格取得のための学校数、入学者数はともに、1990年代から減少傾向にある。いっぽう、美容師のための学校数、入学者数は、おおむね2000年代中盤（2003～07年）をピークとし、そのご横ばいかゆるやかに減少している（理美容師の歴史は飯島1986）。

ただし、資格取得者の志望動機については解明されていない。

1.3 仮説

そのため、この論文では以下の仮説をたてて、実証的に検証していく。

仮説1 (理容師・美容師志望者の違い) 理容師志望者と美容師志望者とで、志望動機が異なるだろう。

仮説2 (男女の違い) 理美容師を志望する男性と女性で、志望動機が異なるだろう。

仮説3 (4グループの違い) 男性の理容師志望者、女性の理容師志望者、男性の美容師志望者、女性の美容師志望者の4グループで、志望動機が異なるだろう。

2 方法

2.1 データ

首都圏にある理美容師資格取得のための専門学校(2年制)で、量的調査を実施してデータ収集した(図2)。2018年1月と10月に、それぞれ1年生の4クラス(うち理容1クラス、美容3クラス)で、A4判1枚に両面印刷した調査票をもちいて、自計式でおこなった。

有効回収数は268人で、回収率は当日の出席者の100%である。内訳は、1月47.0% / 10月53.0%、理容14.9% / 美容85.1%、男性22.4% / 女性77.6%、男性理容3.4% / 女性理容11.6% / 男性美容19.0% / 女性美容66.0%であった。ほとんどが18歳から20歳で、平均18.8歳であった。

2.2 質問

理美容師への志望動機を、できるだけ広範囲に測定するため、以下の自由回答を用いた。下記は理容学生の場合の質問であり、美容学生には「なぜ美容師になりたいと思ったか」をきいた。

質問(志望動機) あなたはなぜ、理容師になりたいと思いましたか?(自由に)

得られた自由回答を、重複を許していくつかのカテゴリへと分類する。そのうえで、どのようなカテゴリが、どのグループに特徴的な志望動機なのかを計量テキスト分析する。計量テキスト分析は混合研究法の1つである(計量テキスト分析については樋口2014、混合研究法についてはCreswell and Clark 2007)。

さらに、分析を補足するために、対象者のうち2名にインタビューを実施した。



図2 調査対象の専門学校の写真

(注) 筆者撮影。対象者の許可をえて掲載。左が理容クラス、右が美容クラス。

3 分析結果

3.1 志望動機カテゴリの分布

志望動機の自由回答は、全 268 人のうち 253 人が記入し、15 人が無回答だった。

253 人の回答を、以下の 8 カテゴリへと振りわけた（カテゴリの例は表 1）。各回答は、すくなくともどれか 1 つのカテゴリにはいる。複数のカテゴリにまたがることもある。ただし、無回答カテゴリは他と重複しない。

まず、「両親の後を継ぐため」「親と一緒に働きたいと思った！親の働く姿を見てあこがれた」など、家業であることを理由とする場合があった。また、「母は美容師ではないのですが、美容学校に行っていたので、小さい頃はよく髪を切ってもらったり、結ってもらったりして、それをしている時の母がいつもよりとてもイキイキしていて、素敵だな、かっこいいなと思ったからです」のように、家族や親戚との理美容経験が動機となっている場合がある。そこで、これらを「家業など」というカテゴリとした（知人からの影響は除く）。

つぎに、「理容の技術がかっこいいと思うからです」「将来の夢はエステシャンだけどシェービングのできるエステシャンになりたいので」のように、特定の技術を身につけたい場合があった。また、「手に職があったほうがいいと思った」「美容師免許をとって将来のために頑張ろうと思っています」「歳を取ってもズーッと働ける仕事だから」のように、資格や継続性を動機にあげる場合がある。これらを、「技術修得など」カテゴリとした。

「高校 1 年生の時、自分探しの旅でカナダ留学した際、ローカルパーバーをしていた男性と出会い、パーバーの魅力に気づいたから」「キラキラしているようにみえたから」「幼い頃から美容師に憧れていたから」のように、憧れを理由とする場合がある（人への憧れと理美容師という仕事への憧れどちらも）。「美を磨くことに興味を持ったから」「なんとなく楽しそうだから」のように、興味や楽しそうという動機もあった。そこで、「憧れなど」というカテゴリをつくった。

やや似たものとして、「人の髪を触ったりすることが好きだから」「保育士か空港関係か美容師で

表1 志望動機カテゴリの例

志望動機カテゴリ	例
家業など	家業、家族や親戚との理美容経験（知人の影響は除く）
技術修得など	技術修得、手に職をつける、資格だから、継続できる
憧れなど	憧れ（人へ、仕事へ）、興味があった、楽しそうだから
仕事に向いてるなど	この仕事内容が好き、向いてるから、服装・髪型が自由だから
人を喜ばせたいなど	人を喜ばせる、美しくできる、変える
なんとなく	積極的な動機がない、明確な理由がない
理美容師にならない	ブライダル関係、メイク、アイリスト志望
無回答	

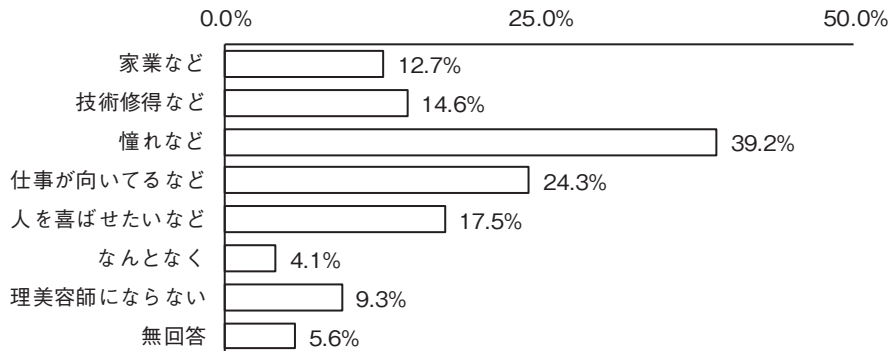


図3 志望動機カテゴリの分布

(注) $N = 268$ 。複数カテゴリへの重複あり。「理美容師にならない」としながら他のカテゴリもありうる。

迷って、自分に合ったものが美容師だと思ったから。一番好きな事が美容関係だったから。でもつぎに生き返ったら空港で働きたい」のように理美容師という仕事が好きだからという場合や、「スーツを着たくなかった。自分のやりたいことで好きな服を着て仕事ができるから」「向いてると思ったから」のようにこの仕事に向いていると考える場合があり、それらは「仕事に向いてるなど」カテゴリとした。

「お客様をきれいにして喜んでほしいから」「ヘアスタイルで印象が変わる場面を今まで何度も見てきて、自分がその変えてあげる立場になりたいと思ったから」のように仕事をとおして他人を喜ばせたい場合や、「人を美しくしたり可愛くできることに喜びや楽しさを感じ、それを職業にしたいと思ったから」「テレビやドラマなどを見て、地味な女の子が可愛く変身する瞬間を自分でも作り出してみたいと思ったから」のように他人をよい方向に変えたいからという場合がある。これらは、「人を喜ばせたいなど」というカテゴリとした。

他に、「普通のOLになれないって思っていたから」「自分に一番近い場所にあった仕事だったから」のように積極的な動機がない場合や、「不意にやりたいと思ったから」「よくわからない」など明確な理由がない場合があった。そこで、「なんとなく」というカテゴリを作成した。

いっぽう、「ブライダル関係のお仕事をしなかったから」「美容師にはなりません。アイリスト希

望です、今のところ」「美容師になる気はなく、元々ヘアメイクアーティストになりたいと思っ
ていて、美容師免許がないといけないので美容学科にはいった」など、理美容師を志望しない者も
いた。そうした場合は、「理美容師にならない」カテゴリとした。

以上の7カテゴリに無回答をくわえると、8カテゴリとなる。分布は図3となった。ここから、
全体では憧れなどが最多で、仕事が向いてるなど、人を喜ばせたいなどが続く。技術修得など、家
業などは多くはなかった。

なお、複数のカテゴリにまたがることは少なかった。1カテゴリのみは205人と最多で、2カテ
ゴリが54人、3カテゴリが8人、4カテゴリが1人いた。

以下では、「なんとなく」「理美容師にならない」「無回答」の3カテゴリを除く5カテゴリを分
析対象とする。そのとき、「仕事が向いてるなど」と「人を喜ばせたいなど」は内容が似ているため、
合併して「憧れ・向いてるなど」カテゴリとする（どちらかに該当するならこれに該当）。

3.2 2グループごとの志望動機カテゴリの比較

では、グループによって、カテゴリの現れ方に違いがあるだろうか。表2で、理容・美容の志望
者での比較と、男女での比較をおこなった。

表2によると、理容師志望者ほど、家業と技術修得が有意に志望動機となっていた。いっぽう、
美容師志望者ほど、憧れ・向いてることや人を喜ばせたいことが有意に志望動機となっていた。

男女別では、男性ほど家業と憧れ・向いてることが、有意に動機となっていた（すべて有意水準
10%をふくむ）。たいして、女性ほど技術修得と人を喜ばせることが動機だったが、後者は有意な
差ではなかった。

3.3 4グループごとの志望動機カテゴリの比較

それでは、男性の理容師志望者、女性の理容師志望者、男性の美容師志望者、女性の美容師志望
者の4グループ別では、どのカテゴリが特徴的な動機となっているだろうか。図4が結果を報告し
ている。

図4によれば、4つのカテゴリごとにみると、家業などは男性の理容師志望者のうち4割強で動
機となっていた（分散分析で有意な差）。他のグループより倍以上多くが、あげていた。

技術修得などは、女性の理容師志望者のあいだで圧倒的に多かった（4割ほど、分散分析で有意
な差）。対照的に、男性の理容師志望者では皆無だった。

憧れ・向いてるなどは、男性の美容師志望者で7割強と多く、つぎに女性の美容師志望者が6割
弱とつづいた（分散分析で有意な差）。

人を喜ばせるなどは、女性の美容師志望者のうち2割が最多で、男性の美容師志望者、男性の理
容師志望者がつづいた。このカテゴリのみ、分散分析で有意な差ではなかった。ただし、女性の美
容師志望者とそれ以外のグループとで比較したら、5%水準で有意な違いがあった。

表2 理容・美容志望別、男女別、志望動機カテゴリの比率の比較

	家業など	技術修得など	憧れ・向いて るなど	人を喜ばせた いなど
理容師志望者 (40)	22.5%	32.5%	32.5%	7.5%
美容師志望者 (228)	11.0%	11.4%	62.3%	19.3%
分散分析	*	***	***	†
男性 (60)	20.0%	3.3%	70.0%	13.3%
女性 (208)	10.6%	17.8%	54.3%	18.8%
分散分析	†	**	*	n.s.

(注) かつこ内は標本サイズ。分散分析で*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$, n.s. 有意でない。

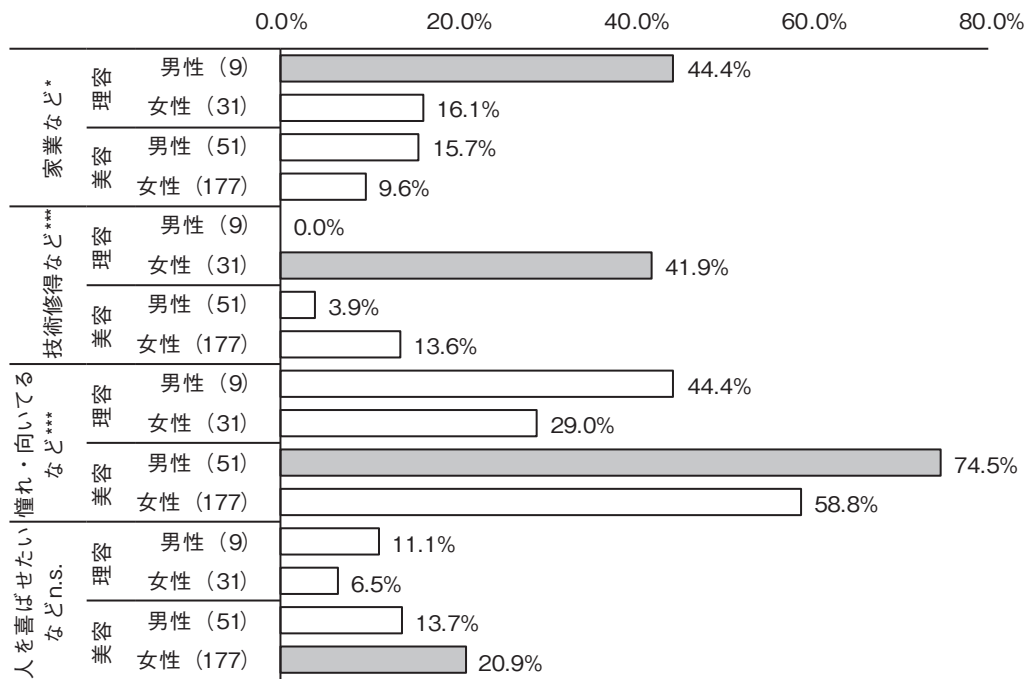


図4 4グループ別、志望動機カテゴリの比率の比較

(注) $N = 268$ 。かつこ内は標本サイズ。灰色は各カテゴリ内で最多のグループを表す。分散分析で*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$, n.s. 有意でない。

4 考察

4.1 仮説の検証結果、インタビュー結果、リサーチ・クエスチョンへの回答

表2より、理容師志望者と美容師志望者で、いくつかの志望動機カテゴリが有意に異なっていた。したがって、仮説1は支持された。理容師志望者ほど家業と技術修得が動機となり、美容師志望者ほど憧れ・向いてること、人を喜ばせることを理由にあげた。

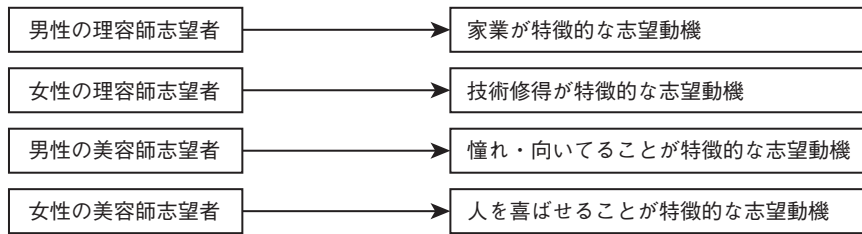


図5 分析結果の要約

(注) 矢印は因果関係を表す。

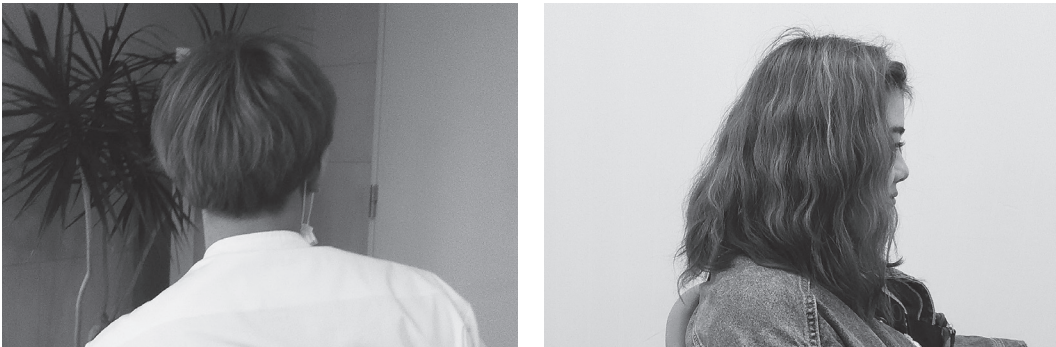


図6 インタビュー対象者の写真

(注) 左はAさん、右はBさん。筆者撮影。対象者の許可をえて掲載。

同じく表2より、男女でいくつかの志望動機カテゴリが有意に異なった。したがって、仮説2も支持された。男性ほど家業と憧れ・向いてることが、女性ほど技術修得が動機となっていた。

図4より、4グループごとに特徴的な志望動機カテゴリが有意に異なった(まとめると図5)。したがって、仮説3は支持された。男性の理容師志望者には家業などが、女性の理容師志望者には技術修得などが、男性の美容師志望者には憧れ・向いてるなどが、女性の美容師志望者には人を喜ばせるなどが、特徴的な志望動機となっていた。

今回の回答者のうち、2名にインタビューをおこなったところ、男性の美容師志望者であるAさんは、美容師を目指す理由をつぎのように語った(インタビュー対象者の写真は図6)。

美容とは技術職のようでも、本当は接客の仕事でその差が力量の差と評価されると思います。私はどちらかというと接客に自信があります。女性から支持されると思います。この自信は小さい頃からの美容室での体験から、くるものかもしれません。(このように)自分は美容師に向いていると思いましたので、迷わず美容専門学校に入りました。

女性の美容師志望者であるBさんは、つぎのように語る。

中学3年の時、美容師さんに憧れたからです。美容室に行って鏡の前に座って、目の前のいつもの自分から、美容師さんの手にかかると変化して、徐々にいつもの子供の自分から「女」の部分が出てくるんです。その時の感激は女でないといけないと思います。(中略)美容師さんが引き出してくれたんです。美容師さんは魔法使いだと思ってしまいました。

これらのインタビュー結果は、おおむね図5と一致しているといえる。以上から、リサーチ・クエスチョンに以下のように回答できるだろう。

リサーチ・クエスチョンへの回答 理容師志望者と美容師志望者、男性と女性、男性の理容師志望者・女性の理容師志望者・男性の美容師志望者・女性の美容師志望者の4グループで、志望動機に違いがあった。したがって、理美容師への動機は多様であり、グループごとに特徴があった。

4.2 レッスン

自由回答の分析から、志望動機はグループによって多様であることがわかった。そのため、入職や転職のときには、グループごとに異なるサポートが必要かもしれない(アメリカにおける転職のメカニズムはGranovetter 1974、日本におけるものは小林2018)。たとえば、女性の理容師志望者にはとくに技術の修得をうながしたり、女性の美容師志望者にはとくに人とのコミュニケーション力を向上させることが、求められている可能性がある。

4.3 課題

この論文では、理美容師の志望者を対象に、動機を調べた。これが、実際に理美容師以外の仕事へと離職するとき、どのように影響するのかを検討する必要があるだろう(美容の社会的役割はHakim 2011、谷本2015、小林2017参照)。

また、理美容師についての今回の知見が、看護師、保育士、薬剤師、教師といった他の(資格を必要とする)職業に、どこまで一般化できるのかを、解明するべきだろう。

[謝辞]

この論文は、森田(2018)をもとにしています。調査対象者の皆さん、調査を許可してくれた専門学校に、心より感謝します。執筆に当たり、今田絵里香氏、内藤準氏、渡邊大輔氏から有益なコメントをいただきました。役割分担は、森田が問題設定とデータ収集と仮説の設定、川端がデータ整理、小林が分析と執筆を行いました。

[文献]

Becker, G. S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, National Bureau of Economic Research. (= 1976、佐野陽子訳『人的資本：教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社。)

- Creswell, J. W. and V. L. P. Clark, 2007. *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks: Sage. (= 2010、大谷順子訳『人間科学のための混合研究法：質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房。)
- Granovetter, M., 1974, *Getting A Job: A Study of Contacts and Careers*, University of Chicago Press. (= 1998、渡辺深訳『転職：ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房。)
- Hakim, C., 2011, *Erotic Capital: The Power of Attraction in the Boardroom and the Bedroom*, Basic Books.
- 樋口耕一、2014、『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
- 飯島伸子、1986、『髪の世界史』日本評論社。
- 小林盾、2017、『ライフスタイルの社会学：データからみる日本社会の多様な格差』東京大学出版会。
- 小林盾、2018、「就職活動で縁故は役立つのか：職業達成とソーシャル・キャピタル」佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと社会：社会学における研究のフロンティア』ミネルヴァ書房。
- 森田厚、2018、「専門門生はどのような就労働機をもつのか：理容師と美容師の比較を事例として」第66回数理社会学会報告（会津大学）。
- 千田啓互、2015、『理容師と美容師の争いは、男と女の戦いだった！：歴史と統計から学ぶ業界の歩み』風詠社。
- 谷本奈穂、2015、「美容：美容整形・美容医療に格差はあるのか」小林盾・山田昌弘編『ライフスタイルとライフコース：データで読む現代社会』新曜社。